

流転の男児

福島県 立花 薫

一、幼時

私の父は立花開。母の名はチヨ。私の中国名は王岐峻である。

私は幼時のことはよく覚えていないが、父の話では、昭和十五（一九四〇）年十月に、当時の国策に従って満蒙開拓のために、一家を挙げて満州に移住することになった。船は四千トンの「満州丸」で、秋の海は荒れて波高く、船は揺れが激しくみんな船室でゴロゴロと転がり、船酔いがひどく死ぬ思いであった。幼かった姉の悦子は腕が小豆色に腫れ上がり、熱も出てきて泣き通しでどうなることかと心配されたが、朝鮮の羅津港に上陸して医務室で診察を受けたら、出発直前の種痘が原因、すぐに治ると診断され安心したものであった。

一家は中国三江省富錦県筆架山開拓団に入った。入団した前の日に満軍の警備隊が山で射殺した虎が、開拓団に運び込まれていたのを見たが、珍しいことではなかった。父は開拓団で畑作班長として活躍し、中国人の友達が六人もできて仲良くやっていて幸せであったが、団の中には現地人との間にトラブルを起こす人も多かったということであった。

昭和十七年一月三日、私が長男として生まれ、家中は希望に輝いていたが、団内のトラブルで、我が家と他の四家族が、緑ヶ丘開拓団に移り住むことになった。そのころの家族の写真があるが、姉と私は嬉しそうな顔をしているが、母は悲しそうな顔で写っている。生活は苦しかったが、父と叔父はよく我慢して働き、三年目には米や小麦、野菜、豆などもたくさん取れるようになった。家畜は牛七頭、他に豚、鶏をたくさん飼うようになり、とても幸せであった。妹の弓子が昭和十八年に生まれてかわいらしく、一家は幸福の絶頂であった。父は射撃の名手で五発で三頭の野鹿を獲ったそうで、櫛で運んだ獲物を家の土間に置いてい

たのを朝起きた私が見て「怖いよ」と母の後ろに隠れてワーワー泣いたと聞かされた。

昭和二十年五月、父が軍に召集されて家を出るとき、何も知らない私は姉と喧嘩して泣かせてしまった。父は泣いている姉と私を両腕に抱いて二人をじっと見ながら「喧嘩するな、母さんの言うことをよく聞くんだよ」と言い、私は「うん」と答えたそうだ。妹弓子は「お父ちゃん」と呼んで手を振って送り、母は「あなた、体に気を付けて」と言っ泣いて見送った。それが父母の永遠の別れになった。

昭和二十年八月十五日、日本が敗れ、私たちには避難命令が出た。母は妊娠八カ月の身重の体で、私（当時三歳）と姉悦子（当時五歳）と妹弓子（当時二歳）の三人の子供を連れ、荷物を牛車に積み、中国人の友達、劉展玉に送られて、佳木斯駅から列車に乗った。綏化、哈爾濱、新京（長春）を経て、奉天（瀋陽）に着き、私たちは駅近くの春日小学校の日本難民収容所に収容された。冬、奉天の気温は零下二十度以下に下がり、食べ物も乏しく、着物も少なかった。難民収容

所では多くの人が病死した。私の母は秋に四人目の子を産んだがその子も死んだ。そして妹弓子も餓死してしまった。満州に侵攻したソ連軍は木材、石炭、発電機などを本国に持ち去ると共に、民間人のラジオ、時計、指輪など貴重品を略奪したり、日本の婦女子に乱暴するなど軍紀は乱れに乱れていた。このような混乱に加えて、耐え難い厳しい寒さと飢えによって、日本人難民たちは体と心の両面で極度に追いつめられた。当時の日本人の家族は、生きていくために、子供を中国人に売ったり、譲ったり、年頃の少女は中国人の男性と結婚させられたりする人が多かった。最近よく言われる「残留孤児」「残留婦人」の原因である。

ある日、突然、中国人の夫婦が私たちを訪ねてきて「日本人の子供が欲しい」と申し出た。母は自分も病気になるって子供にまで手が回らなくなっていたので、このまま子供を病気で亡くすよりは、中国人に育ててもらって生き永らえてほしいと思ったのであろう、王万芝・施桂蘭と名乗るこの中国人夫婦に「息子をよろしく、大事に育ててください……。」と言って私を預け

た。

その後、親類たちは日本への引揚げを始めたが、私の母は長男を手放したことが心残りであったのか、私を捜したいからと中国に残留していた。母の妹チエも中国人王少清と結婚していたので残留することになった。

二、養父母について

養父母は共働きで、同じ紡績会社に勤務している善良な人たちであった。生活レベルは中流以上で裕福であり、夫が三十九歳、妻は二十四歳、結婚六年目であったが子宝に恵まれていなかった。不妊症と診断されていたが、もらい子をすれば自分の子供も産まれると信じていた。「子供をもらいたいなら日本人の子供がよい。頭はよいし、瀋陽（奉天）駅付近の日本人難民収容所には孤児がたくさんいるので、もらうのは簡単だよ」と近所の人のアドバイスを受けた。そんな経緯から私がもらわれたのである。三歳の私には何も分からず、中国人の家庭に入った。このときから日本人である私は中国人として育てられ、王岐峻と呼ばれる

ことになった。自分の子供がいないのでまるで本当の子供のように、いつも私をおんぶして、食べ物、着る物、玩具など私が欲しがるものは何でも与えてくれた。覚えていた日本語は、すぐに中国語に切り替えなければならなかったが、子供は現実の生活に適應することが早いのであろう、すぐに中国語になじんだ。私は五歳になって、養父母が勤務している会社の付属保育所に入った。ここで、漢字、音楽、衛生常識を学んだ。楽しい一年だった。六歳になって小学校に入学を申請したが、校長先生は「お前はまだ小さいから入学は来年にしよう」と言われた。私は入学を断られ、教科書ももらえず、勉強したいと思う期待が大きかっただけになりかした。新しい中国は建国したばかりで、内戦によって校舎も、教育そのものも荒廃していた。翌年の夏、私は再度小学校に入学申請をして許可された。中国では九月が入学の時期で、私は新しい教科書ももらい、とても嬉しかった。私のクラスの生徒数は四十五人で、年齢は様々だった。私は七歳であったが、八歳、十歳、十三歳、そして十八歳の者もい

た。当時の中国では文盲の人が多かった。特に農村から都会に移ってきた人の中には、小学校に行ったこともない人がいた。当時、中国の一般家庭では子供数は五人が普通だった。私のように一人っ子は珍しく、もらい子だろうと疑われ、後に日本人からもらった子とのうわさが広まった。幸福なはずの私は、いじめの対象になってしまった。日中戦争によって民族としての恨みがあって、日本人に対しては良い印象を持っていなかった。「日本人のチビ」「日本鬼子」「小日本鬼」

「小日本」「打倒小日本」と学校、街道、飯店、映画館、どこに行っても様々に罵倒された。ときには集団で暴言を浴びせられたり、暴行を受けて頭と顔に数回怪我をさせられたこともあった。そのたびに私は泣きながら家に帰った。母は、「またいじめられたのでしよう」と言った。私は父母に心配を掛けたくないので、いつもなにも話さなかった。でもこのことによつて「自分は日本人である」ことを自覚した。学校でも私はいじめられたが、かばってくれた人もいた。十八歳の女性で、いつも「いじめないで」といじめっ子に

注意した。彼女は、「日本軍が侵略行為をしたのは悪い。だが日本人の子供には何の罪もないのだ」と言った。どんなにいじめられても私は勉強が好きで、学校を一日も休んだことはなかった。

二年生になって、私をかばってくれた十八歳の女性はお母さんになって小学校を中退した。そのころは、結婚、妊娠、出産によって小学校を中退することは珍しくなかった。十八歳の小学校一年生には学校より家庭の方がふさわしかった。私が小学校六年生になったときには、彼女はもう三人の子供の母になっていた。私は彼女に対して、同級生としての友情を忘れることはなかった。

三、少年時代

一九五七（昭和三十二年）年、中国全土で「反右派闘争」が始まった。小学校六年生の私は、政治運動には関心がなかったので学習に専念した。教師の中には「反派分子」として批判され失脚した人もいた。一九五八年夏、私は小学校を卒業したが、当時、中国には中学校が少なかったので中学校に進学したのは十パー

セントくらいで、多くの人は就職したり、職業訓練校に入学した。私は小学校の成績が良かったので瀋陽第三十一中学校の入学試験を受けて無事合格した。

中学生になった私は、「大躍進」「大煉鋼鉄」「支援農業」などいろいろな活動に参加した。その時期に行われた「文字改革」「教育改革」の運動は中国にとって良いことだと思った。「文字改革」は、中国中央政府の文字改革委員会によって、漢字の簡略化、注音字母の統一など、文字改革の方式を決めた。これは文化や教育の普及運動に有利だから、全中国の四億五千万人、五十六カ民族に対して有益な話だと思った。教育改革もすばらしかった。中学校は初級と高級に分かれ、いずれも三年制で、小学校を終えて初級、高級へと進学する。初級・高級、いずれも入学試験を受けて合格しなければならない。高級中学校は日本の高等学校に当たる。しかし、特例的な制度もあって、瀋陽第三十一中学校には初級、高級中学校を三年で区切らず五年間通して学習を終了する五年一貫制中学と、六年間を通してで終了する六年一貫制中学があり、いず

れも三クラスで各クラスとも生徒数は四十五人である。五年一貫制の生徒の方が成績は優秀で、大学進学率は非常に高かった。私は五年一貫制の中学に入学し、卒業することができた。卒業後、私は同級生二人と共に西安国立医科大学（六年制）に推薦されて受験したが、合格したのは私だけだった。私にとっては幸運だった。学科試験の後の身体検査にも合格した。

四、青年時代

西安は昔の長安、中国の古都だ。西安の国立医科大学は、中国人民解放軍第四軍医科大学だった。軍医大学は、日本の防衛医科大学に相当するもので入学後は軍服を支給され、士官待遇で、学費が不要なうえ手当てまで支給された。大学の教授も設備も一流であった。教授は欧・米・日に留学して研修し、それぞれ専門科日の博士学位を持っていた。私はここで政治軍事学、高等数学、物理学、解剖学などの各学科や外国語等を学び、付属第一医院で医学を実習した。教授、看護婦は皆親切だった。毎日朝五時半に起床、食事の時間が十五分間、隊列を組んで教室に向かい、一日中勉強、

勉強だった。毎日が緊張の連続だが、その緊張が楽しかった。課外活動は音楽を選び、週一回の映画鑑賞も楽しかった。食事は大変おいしかったが、日曜日は朝夕の二食なので、町へ遊びにいった食事をした。羊肉泡饅、豚足がおいしかった。また、スイカが安くて甘かった。スイカを食べ過ぎてトイレを探すのが大変だったこともあった。見物するのは西安慈恩寺の鐘樓、大雁塔、小雁塔、興慶公園などで、どれもすばらしかった。夏休みにはよく華山に登った。華山は中国名山の一つであり、映画「智取華山」によってさらに有名になった。華清池には皇帝の愛妃楊貴妃の風呂場として有名な風呂があってよくここで入浴した。「西安事件」のときの蔣介石総統の寝室も見物した。夏の西安は暑い。しかし水を飲む習慣はないので私は湯と茶を飲んだ。

冬休みは春節に当たるので、養母に会いに自宅に帰った。西安駅から列車に乗って二十数時間で北京に到着、瀋陽行きの列車の出発までの間、見物したり買い物をしたりする。瀋陽駅まで十二時間の旅をして

やっと自宅に着く。久しぶりの母子再会は嬉しかった。しかし三日間で二千キロメートルの旅はさすがに疲れた。しかし、急行列車を利用したから三日で済んだので、小駅にも停車する普通列車ならば、一週間も掛かるので、往復だけで休暇が無くなってしまふ。中国は広いのだ。私が軍医大学のいろいろな写真を養母にあげると、養母は大変喜んで「良い息子だ」と自慢していた。

大学の同級生には、北京市・上海市をはじめとして中国各地方の出身者がいたので全国各地の友だちができてとても嬉しかった。また、各地方の方言のおもしろさを覚えた。

私は、自分が日本人であることをだれにも話さなかった。やっと一人前の中国人になった今、だれも私の幼年のことを知らない。特に昔いじめられたことを思うと、非常に悲しくなってくるが、今の私は中国人として生きなければならぬのだから、今さら日本人だと話して面倒な事態を起こしたくなかった。

軍医大学は男女学生の交際、結婚は禁止である。大

学には女子の学友が数人いたが、私は馬鹿まじめで、決して恋愛はしなかった。だが私は、中学校の同級生で瀋陽医科大学に在学中の女子大生の劉桂芝と文通していた。二千キロメートルの距離を隔てて、恋の便りを交わした。彼女は中国共産党の幹部の長女で、後に私の妻になった。

文化大革命で国中が大混乱になったが、私には何事も起こらず無事だった。軍医大学を卒業し、軍医として陸軍第三十九軍に配属され、外科と内科が私に与えられた診療科目であった。卒業して二年後、文通していた劉桂芝と結婚した。彼女は医科大学を卒業後、瀋陽の病院で産婦人科医師として勤務していた。健康で明るい女性だ。結婚後二人の男子が生まれた。一九七二年、私は東北三省を管轄する大連の瀋陽軍区軍医学校へ教官として赴任した。その後、家族も瀋陽から大連に転居し、大連での生活は幸福そのものであった。

大連は遼東半島の西南端にあつて、緑の山々と静かな海に囲まれた、中国一の美しい都市である。私は海が好きで福家庄海水浴場でよく泳いだ。かつて大連の

町にはたくさん日本人街があつたが、当時の家屋は今もたくさん残っていて市内の至る所で見受けられた。東京上野の駅に似せて作られた大連駅は今も昔の姿のままだし、旧満鉄病院は鉄道病院として残っている。中山広場に面した中国銀行、大連賓館、大連教育局、大連人民銀行などは、日本人の手によって造られた建物で、当時の趣を残したまま今も使われ続けている。星海公園、老虎灘公園は名勝地として、国内外の観光客も多くいつもにぎやかな笑い声が響いていた。

五月の中ごろになると、大連の町の街路樹アカシアが一斉に白い花を咲かせ、甘く香ばしい、どこかしら寂しげな匂いがあたりいっぱい溢れた。また、この花は甘くて美味しく、中国人は肉饅にも入れる。アカシアは人に食べられながらも二十メートル以上の高木になる。私は、このおう盛な生命力と不撓不屈なところが好きだった。

五、故郷の瀋陽

私は、中国黒龍江省佳木斯の近くで生まれ、三歳から瀋陽で中国人の養父母に育てられ瀋陽子として成長

した。だから私の故郷は瀋陽である。瀋陽は清朝発祥の地で、松など緑の多い風格のある古都である。一六三七年に都「盛京」が築かれ、一六六四年、北京に遷都した後は「奉天府」が置かれ、後に瀋陽と改名され、歴史的にも由緒のあるところである。

少年時代から、私はよく瀋陽故宮、東陵、北陵へ遊びに行った。故宮は市内の中央部にあって、現存するものでは北京の故宮に次ぐ規模の宮殿遺構である。東陵は市の東部にあって清の太祖ヌルハチ（奴爾哈赤）夫婦の陵墓。参道の老大樹や石彫の動物は北陵を凌ぐ風格がある。北陵は昭陵とも呼ばれ、清の二代目の皇帝皇太極夫婦の陵墓で、この参道の両側には馬やラクダの石彫が並んでいる。よくこの石彫の動物に乗って遊んだ覚えがある。敷地内には瑠璃瓦の美しい建物が並び、それを取り囲む回廊のさらに向こうに小山の陵がある。瀋陽中山公園、労働公園、南湖公園、万泉公園などは非常に美しく、優雅な風格がある。公園は中国の若者にとって最適な恋愛の場所である。瀋陽は食べ物もおいしく老辺餃子館、李連貴大餅など

で知られている。あの「君子蘭」は瀋陽の花で、一般家庭でも盆栽として育てられ、皆に愛されている。

一九五九年春、私が中学校一年生のときに、養父王万芝が肝硬化症によって亡くなった。当時、養母は三十七歳だったが、以後ずっと再婚せず母子二人で暮らしてきた。養母は、私が日本人であることを一度も口にしなかったし、私も何不自由なく過ごしていたので、もらわれてきた当時のことについて養母に聞いただしたりはしなかった。養母は紡績会社に勤めながら、家庭の仕事も万全だった。私は学校で一生懸命勉強し、成績も良かった。養母の手料理は何でもおいしく、特に魚のあんかけ、卵のトマトスープ、ニンニクの芽の炒め物などが上手だった。私は、生母のことは何一つ記憶になく、この養母の愛情溢れる手料理がお袋の味だった。今でも養母の手料理に似た食べ物が好物で、時々食べると当時を思い出している。

瀋陽の中国医科大学の校庭には、日本人が植えた桜の木がある。毎年春には美しい花を木いっぱいにつける。私が桜の花を見ていると、何安光教授の夫で、病

理教室の張宝庚教授が「これは桜の花ですよ」と教えてくれた。彼は満州医大のこと、そしてその桜のことをよく知っている。瀋陽には桜の木が少ないので、若い人たちは桃の花と間違えることが多い。

私は水泳が好きで、よく瀋陽体育館で練習した。夏の盛りには、瀋陽の気温は三十五度を超える猛暑なので、私は毎日南湖で泳いだ。

小学校時代から映画が好きであった私は、よく東北電影院、八一劇場、運輸工人倶楽部などに行き、いろいろな映画を見た。中国映画の「白老女」「渡江偵察記」「祖國的花朵」などは十数回も見た。遼寧人民芸術劇院の新劇も鑑賞した。俳優の李默然の演技がすばらしかった。葵少武の雑伎団「飛車走壁」は有名だった。遼寧歌劇院の管弦楽「穆桂英掛帥」「小刀会」もすばらしかった。

瀋陽の道路はとて立派で、坂道が全然ないので、自転車で一時間や二時間走っても疲れることはない。自転車は便利で、経済的で、環境に優しい。当時は、夜間無灯火は違反ではなかったが、二人乗りは違反で

罰金を取られた。瀋陽には、私の生母や妹などを含めて多くの日本人や世話になった養父母などが静かに眠っている。また、私の幼な友達、学友、戦友、先生、親戚などは瀋陽で元気にしており、よく夢にも見るので、一度瀋陽に帰りたいたいと思っている。

私は解放軍幹部として、哈爾濱、長春、大連、北京、上海、天津、西安、鄭州、長沙などに行き、それぞれみんな良い街であったが、やはり最も愛した街は瀋陽である。瀋陽は私の心の故郷である。

六、姉弟再会

一九七六年夏のある日、二人の中年女性が診察して欲しいと来院した。診察が終わったとき、患者は、一通の手紙を私に渡して帰って行った。私は手紙と、封してあった写真を見て驚いた。手紙を読むと、「あなたは、私の実の弟かも知れないと思う……。もしあなたの下腹部にヘルニア手術後の疤痕があったら私とあなたが姉弟であることはまず間違いない」と書かれてあった。私には確かに下腹部左に三センチメートルぐらいの手術の疤痕があった。また当時の瀋陽駅付近

の日本人難民收容所のこと、私が中国人の養父母に預けられたことなど、その時期、場所、人物が記憶と一致することなどすべて思い当たることであった。二人の中年女性の一人は私の実の姉、悦子であった。姉は、母が亡くなった後、母の妹チエに育てられていて、二人とも同じ瀋陽に住んでおり、居所の分からなくなつた私をずっと捜していたそうだ。私が養父母に預けられたとき、姉は私がいなことに気が付いて、「薫は？」と母に尋ねたら母は、「中国人夫婦に預けた」と泣きながら話し、それ以来姉の心から私のことが離れず、ずっと捜し回っていたと言う。姉は、わずかな手掛かりをもとに養母が勤務していた紡績会社にいたという年寄りにも聞いたりして、私が弟であると確信していたと言う。そんな経緯があつてから、確認のため今度は、私が姉と一緒に生母の妹チエを訪ねた。叔母は、私の容姿や、今に至るまでのことなどを総合的に判断して、私たちが姉弟であると言つた。その後、叔母の家で数回ごちそうになつた。

姉、叔母たちから、私の無事が、故郷の父などに伝

えられ、いろいろと調査の結果、親子関係が確認され、私の家族五人で、六カ月間の一時帰国が実現した。

七、一時帰国

昭和五十七年二月四日午後、私は妻子と養母の五人で東京成田国際空港に着き、父や県の引揚者団体の滝田会長、役場の渡辺収入役、福島県庁の職員らの出迎えを受けた。混雑する空港の人混みの中に、私にそっくりの父を見つけた。私は走り寄つて父に抱きつき、お互い三十七年ぶりの涙の対面となつた。二人とも何か話そうとしながら言葉にならなかつた。

今日に至るまでの私の幸福な成長には養母施桂蘭の献身的な愛情溢れる養育があつた。養母は、「瀋陽の日本人難民收容所で、栄養失調のためにやせ細つていたあなたを見つけ、私に子供がいなかつたので自分の子供として引き取つた」と言っていた。

養母は、東北本線の車の中で滝田会長に「王は親孝行な子供で、これまで実の親子以上の強いきずなで、幸福な生活を送ることができた。四年前、情報が分か

るまでは日本人の子ということは明かさなかった。しかし、いつかは日本人であることを知らせなければとは思っていたので、姉と出合い父も健在と知った機会に、養子にした経緯を話し、日本に帰国するよう勧めた。しかしこの子は、お母さんを置いては絶対に帰らないというので、それでは私も一緒に行きますという事で今回の帰国になった」と話した。

この話を聞いた滝田会長は、一時帰国に養母を同行したというのは全国でも例がないのではないかと養母施桂蘭の優しい心遣いに感激していた。

八、孤児の養親に感謝

当時、中国に残留した日本人孤児は約一万人。このうち両親の名前や出生地が分かっていたのは百人に一人と言われていた。

昭和五十五年六月、残留孤児の最も多い中国黒龍江省を訪れた福島県郡山ユネスコ協会の佐藤会長は、日本人孤児を育ててくれた中国の養親のこれまでの苦勞を知り、ユネスコ協会の総会で、「わが子同様に育ててくれた養親の恩義に報いるための感謝の募金」を行

うことを提案した。満場一致で可決され、昭和五十七年六月から一カ月間募金活動を実施して、たちまち二百万円を突破したとのことであった。

この募金は同年八月、黒龍江省ハルビン市の対日友好協会を通じ同省内の養親に贈られた。

郡山に一時帰国した私の養母施桂蘭に対しても、「感謝の志」第一号が贈られた。「何の縁もない日本人孤児を育ててくれた中国人養父母にお礼を申し上げます」との感謝をこめた十万円を養母は受け取った。またその他の団体からも金品が贈られた。

このことは福島民友新聞・福島民報で報道され、大きな反響を呼んだ。

六十二歳になっていた養母は、思いがけない感謝の気持ちをもたらして「やはり日本人は義理人情に厚いですね」と言って目頭を熱くしていた。

九、永住決心

一時帰国した私は、将来どうしたらよいかについて考えた。帰国以来三カ月、私は自分で日本の街を見て、新聞、テレビなどを通じて日本の社会を理解する

ようになった。日本には民主主義、自由、また裕福な生活など良い面が多い。問題は、四十四歳になった私にとって、言葉の障害や職業に就くことの困難など、日本で生活するのは容易なことではない、とよく分かっていた。しかし、このまま中国に戻ったら、再び日本に帰ることはかなり難しいことも承知していた。特に私は、中国人民解放軍に在籍していて、医療衛生幹部であり、日本への永住帰国の許可を受ける手続きが複雑で、いつ帰国が許されるかは分からない。中国に戻って生活を続けることは、仕事、社会的な地位、生活など私自身にとっては何の問題もない。ただ、いったん日本人であることが公になってしまったので、これが原因となって子供たちがいじめられることを心配していた。私は日本人、子供も日本人である以上、やはり日本で生活することが自然であろうと考えたし、なんといっても子供の将来を考えなければならなかった。二人の子供はもう日本の小学校と幼稚園に入っていた。日本語の上達も早かった。永住を決心するなら早いに越したことはない。

国籍が日本人であるとはいうものの、言葉も生活習慣も異なる中国で四十余年にわたって過ごしてきたので、日本で生活する苦勞を思うと大変不安であった。中国の学歴、職歴、資格などは何一つ日本では通用しないので、一から始める、というよりゼロから出発しなければならなかった。私は日本の社会組織について調べてみた。中国では、内科、外科の医師として患者から厚い信頼を受けていた私だったが、日本の医師法の壁は厚かった。日本国内で開業する手だては二通りしかない。日本の医科大学に入学して、医師の国家試験にパスするか、予備試験を受けて国家試験の受験資格を取得、その後に国家試験に挑むかだ。しかし、前者は最低でも六年の歳月と多額の資金を必要とし、予備試験は非常な難関で、今まで中国引揚者からの合格者は出ていないという。中国の医師資格によって、日本の医師免許を取得することはできないが、鍼灸師の免許を取るのとは可能なが分かった。この資格があれば将来日本で自立して行けると確信したので、私は日本に永住する決心をした。とりあえず、正式な復員

申請書を瀋陽軍区に郵送したが、許可されなかった。

一九九一年五月、大連市に行つて再度復員申請書を提出した。一週間後、大連周水子空港で瀋陽軍区軍医学校政治部保衛科幹事から回答があつて「復員ではなく、除隊だ」と言われた。私は除隊の決定が不服で、絶対に受け入れられないと申し立てた。中国人民解放軍で十九年間勤務した実績がある。規定によつて、復員の場合は、それぞれの出身省に帰ることになっている。私は日本人だから、復員して日本に帰るのは自然なことである。

五月下旬日本に帰つてから、当時の中国共産党中央委員会江沢民総書記をはじめ政府要人に手紙を出し復員申請の理由と経過などを申し出た。一九九一年十月、私の復員申請は正式に許可されて、「復員決定」の文書が出され、後に瀋陽軍区軍医学校から「復員軍人証明書」が郵送されてきた。

昭和五十七年六月、私たち一家五人は福島県安達郡大玉村の実家から同じ福島県の原町市に移転した。原町市は浜通りで気候が良く、冬は雪が少なく、商業が

盛んである。

原町市で私を受け入れてくれたのは、漢方、鍼灸、接骨などを経営している杏林堂の岡崎さんである。私が永住を希望していることを聞き、中国本場の漢方医学を杏林堂の治療に生かしたい、と私を招聘してくれた。私は、中日友好のためにも中国医学を広めたいと考えていたので有り難く受けることにし、養母、妻、子供二人の一家五人で、杏林堂に住み込むことになった。私はこの機会に、日本の先進医学について知りたいたいと思ひ、原町市と小高町の病院を見学した。

原町市本町の渡辺病院を訪れ、渡辺院長の案内でCTスキャナーなど最新医療機器の説明を受けた。その後、ソーラーシステムを採用した小高町立病院を訪れた。鈴木町長、村越病院長の案内でリハビリテーション室や産婦人科の診療室、病室などを見学した。病院内は明るく清潔で、患者本位の施設造りがよく分かった。

原町市でも多くの方に、大変お世話になった。その一人、佐々木先生も中国からの引揚者で、ご主人は満

州国の職員であったが、現地で病死、先生は三人の子供を連れて日本に帰国した。先生には物心両面にわたって何かとお世話になり、感謝している。

昭和五十八年四月、私は仙台赤門鍼灸柔整専門学校に入学、家族五人も原町市から仙台に移転した。仙台は東北の都で、良い所だ。多くの方々が親切で、暖かく私や家族を援助してくれて、感謝の気持ちでいっぱいだった。学校でも、みんな親切で、大変にお世話になり三年後に卒業、国家試験にも合格し、鍼灸師の資格を取得することができた。免許状を見たときは感激した。こんなに嬉しかったのは日本に来て初めてであった。当時、宮城県内で中国帰国者が職業関連の国家試験に合格したのは初めてのことで、全国的にも少ないということだった。私は妻の両親が、私たちの日本での生活を心配しているのを知っていたので、これでやっと安心させられると胸をなで下ろした。

昭和六十一年七月、私は福島県郡山市の安積町で、「王峻鍼灸治療院」を開業した。以前、保育園であった木造二回建て住宅を改造し、一階を診療所に、二階

を住居にした。床の張り替え、ペンキ塗りもすべて私と親類たちの手作業だったが、七月十日ようやくオープンにこぎつけた。

鍼灸は、中国で二千年の歴史があり、東洋医学の中でも、葉草、按摩などと共に、世々代々受け継がれた文化の精華である。中国全土の医科大学、中医（東洋医学）大学、衛生医療専門学校では、必修の科目の一つである。欧米からも北京、天津などに鍼灸を勉強しに来ている。かつて私が遼寧省蓋県に駐屯していたとき、私は、「農村医者訓練所」を開設したことがあったが、二十数人の青年に鍼灸学を教えた。西洋医学にも卓越した面はあるが、東洋医学にも優れた点がある。中国の指導者毛沢東が言っていた「中西医結合」は誠に偉大な方針である。自己の長所を十分に発揮し短所を補えば東洋医学の立派な点を受け継いで行けると確信した。また、鄧小平氏は、「白猫であろうが、黒猫であろうが、ネズミを捕らえる猫が一番よい猫だ」と言った。医師であろうが、鍼灸師であろうが、患者から信頼され、病気を治せば良い医者に違いな

い。最初は患者が少なかったが、徐々に増えてきた。

私の長男は、日本の高校と専門学校を卒業して横浜で就職した。次男は、日本大学工学部を卒業し、社会人として一生懸命働いている。私も鍼灸治療院を経営しながら、非常勤講師として尚志高等学校で中国語を教えている。妻も鍼灸師の免許を取得し、一緒に東洋医学を研究している。生活は裕福ではないが、自立して充実した生活を送っている。

養母施桂蘭は一九九一年五月八日他界、享年六十九歳であった。私は養母の温情を決して忘れない。毎年五月八日には、養母の遺影の前に花と線香を欠かさない。また、同時に中国人民の温情も決して忘れない。

私の両親は日本人であるが、育ててくれたのは中国人の養父母である。父は、私が生まれたときに当時の在満州国日本大使館に出生届を出していたので、私には日本の戸籍があった。しかし中国で生まれ、中国で四十年余の間生活してきたので、日本人よりも中国人だった。中国語が母国語だ。私は、中国では日本人だと言われ、日本に帰っては中国人だと言われた。だが

私は中国人であろうが、日本人であろうが、全然気にしない。私は国際人になりたいから、中国人と日本人、それぞれの優れた点を身につけたい。そして、今後とも平和な日中友好の懸け橋になりたいと願っている。日中両国人民の世々代々の友好のために、微力ながら貢献したいと日夜願っている。

〔編注〕

立花薫さんの父親である立花開さんの手記「一族あげての開拓団の果ては」が「平和の礎―海外引揚者が語り継ぐ労苦III」に掲載されています。

運命の半生

福島県 立花悦子

一、私の生い立ち

私は、福島県の大槻という静かな町で、立花開の長女として昭和十五（一九四〇）年五月二十日に生まれ